

【研究論文】

# 御殿形厨子の研究 (3) —上焼御殿形厨子の編年—

## A study on the urns of palace style (3)

### Chronology of “Jōyachi” pottery baked at high temperature with glaze

宮城 弘樹  
Hiroki MIYAGI

#### 1. はじめに

筆者は「御殿形厨子の研究(1)」(以下、研究(1)と略)で紀年銘資料を集成(宮城2019)、「研究(2)」では赤焼及び荒焼御殿形厨子の編年研究を行った(宮城2020)。前者では紙幅の都合俯瞰的に紹介し、後者は陶製御殿形厨子のうち古式の赤焼及び荒焼御殿形厨子(以下、赤焼、荒焼と略)の細分編年について検討を行った。赤焼、荒焼におおよそ後続するものが釉薬を施したいわゆる上焼で、本論ではこの上焼御殿形厨子(以下、上焼と略)の編年研究を行うことを目的とする。

研究方法は、研究(2)同様紀年銘資料を定点として型式学的検討を行う。なお本論でいう上焼は、上江洲均による編年(以下単に上江洲、上江洲編年と略)の上焼本御殿、上焼ツノ付き、上焼コバルト掛けをまとめた総称として用いる。上江洲編年では釉薬や焼成技術によってこの3形式に分類し、時間的に推移が指摘されている。

上焼の研究もまた赤焼や荒焼同様、1980年上江洲によって行われた編年研究を端緒とする。上江洲は、陶製を赤焼、荒焼、上焼本御殿、上焼ツノ付き、上焼コバルト掛けに分類、それぞれ一形式として細別した。各形式は銘書資料を用い年代観について言及している。本論で対象とする上焼の年代観については、本御殿が道光元年(1821)から明治中頃にわたって集中し、大正以降もつくられるとする。上焼ツノ付きは道光12年(1832)が古く明治8、9年(1875・76)から増加し、昭和14・15年(1939・40)までにはかなりの数にのぼると指摘した。また上焼コバルト掛けで一般に多いのは明治34・35年(1901・02)頃から戦後までで、特に大正に多いとされる(上江洲1981)。

上焼御殿形厨子は考古学研究の対象とする型式学的研究はほぼ未着手である。一方で現代の陶製御殿形厨子に引き継がれており、民俗学的、あるいは美術史からの研究アプローチが幾つか知られている。例えば、照屋善義はその製作行程(図1)を紹介しており(照屋2000: 37-38)、倉成多郎は、伝統的な技法を引き継ぐ2人の陶工の製作を聞き取り、記録して御殿形厨子の製作行程について報告している(倉成2005)。

御殿形厨子は石製と陶製があるが、玉陵の調査では石製から陶製の移行が尚敬王の厨子からはじま

ると指摘する（文化財建造物保存技術協会1977：80）。近年この年代観について倉成多朗によって新たな見解が示されている。具体的には、上江洲編年の御殿形厨子の出現年代が18世紀末から19世紀初頭であること、蓮葉・茎部に塗られる呉須釉が使用された沖縄産陶器の年代観から、1759年の洗骨時に厨子が準備されたとは考えにくいと指摘する（倉成2019:66）。

筆者は、上焼本御殿形は玉陵の事例から18世紀中頃には製作されていたものと考えられるが、いわば特注品で少量生産にとどまったと想定した。その上で、荒焼を排して上焼が広く使われるようになるのは、1840～1860年頃であることを記年銘資料から指摘し、上焼は本御殿形が早く、ツノ付きのいわゆるソーバーが後続するように登場するとして、上江洲編年を追認した（宮城2019:8-11）。

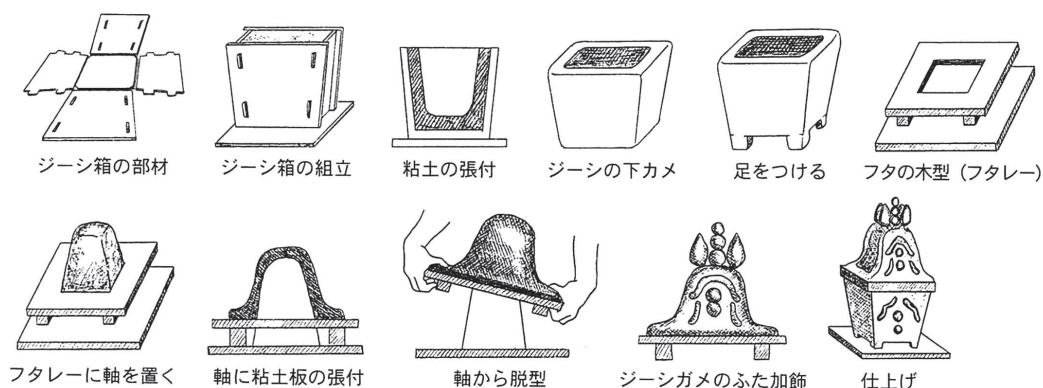


図1 御殿形厨子の製作行程（照屋 2000）

## 2. 分析対象資料の概要

上焼は釉薬の施釉されたものを指すが、釉薬施釉という点では荒焼に施されるマンガノ釉もまた釉薬である。既に荒焼は研究（2）で論じており、本論ではこれを除外し褐釉やコバルト釉、白化粧後に透明釉を施す施釉陶器を総称するものとして上焼を用い、これを分析対象とする。あわせて、形態的变化を確認する意味で、火葬用の素焼塗料彩色御殿形厨子も分析の対象としたが、これを上焼に含むという意図はなく、あくまでも型式学的検討のための追加資料として扱う。

上焼御殿形厨子の装飾は蓮華文の貼付けを主とし、像（僧形、菩薩）や龍文、獅子などがみられる。釉薬の色彩は様々で、白色、褐色、緑色、黄色、青色があり、朱などの顔料を塗るものが希に認められる。

上江洲編年では、いわゆるソーバー（商売）と呼ばれる重ね焼き（図2）を行うことを目的とし、ツノを屋根の隅に3本立てる資料群と、コバルト釉が近代になって海外から輸入された顔料で



図2 上焼ツノ付御殿形厨子（佐賀県立九州陶磁文化館 1998）

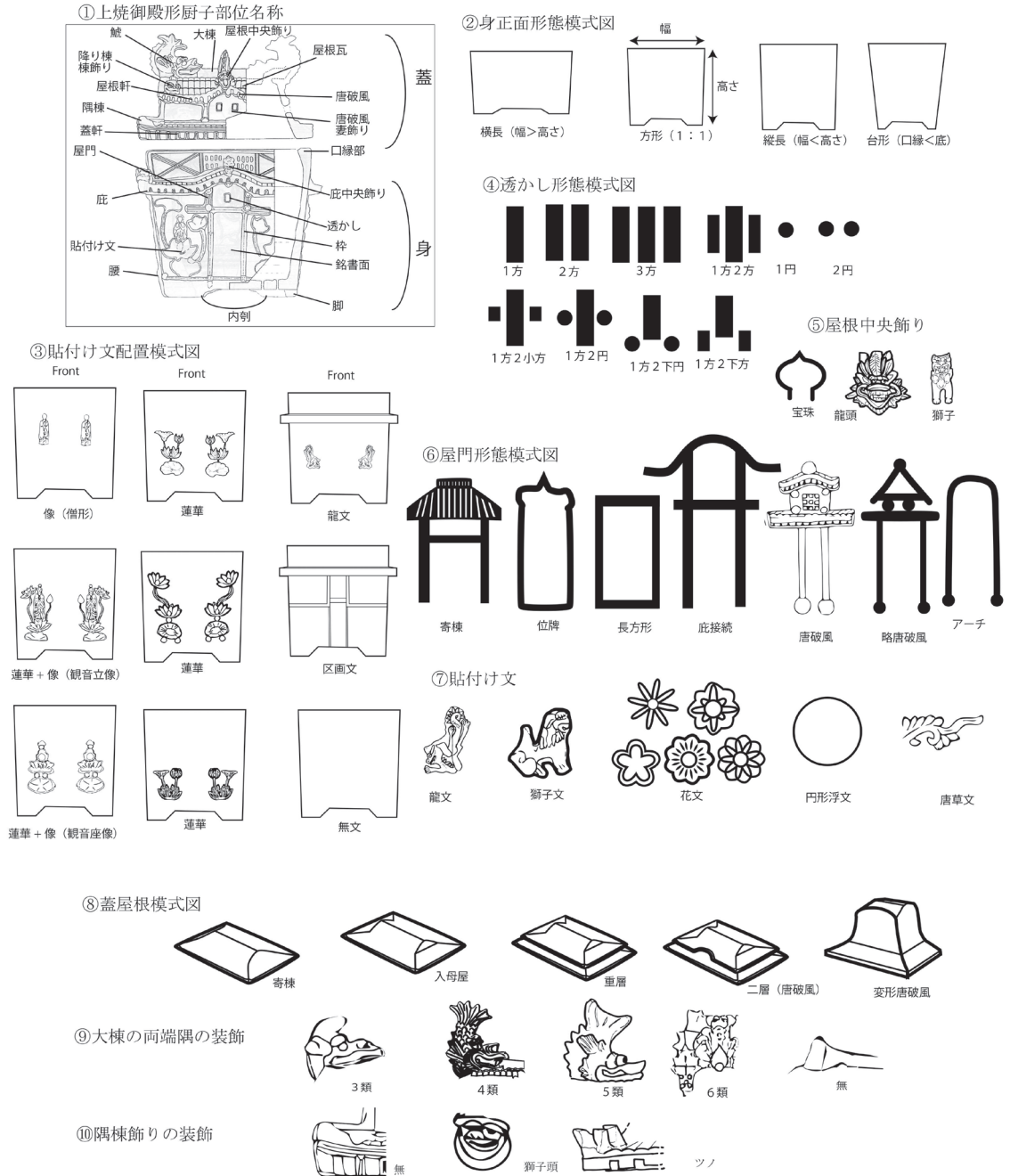


図3 上焼の各属性の分類模式図

あることに着目しこれを分類する。分類の有効性に異論は無いが、本論では前型式からの系譜関係を明らかにすることに主眼を置き、主として形体的特徴、銘書面（屋門）意匠、貼付文などについて考察を行う。

上焼は基本的に正面に銘書面を持ち、蓮華文もしくは蓮華文に像を配置するモチーフが貼付けられるものがほとんどである。しかしその後半期には貼付文はかなり簡略化し、文様が褐釉、緑釉、酸化コバルトで彩色され、時に原形が分からないものも認められる。

屋根形式には入母屋、寄棟の単層のものも認められるが、多くの資料が外観二層、三層となる。赤焼でみられた大棟中央に宝珠が付されることはほとんどなく、これに代わるように屋根中央飾りは龍頭に変化、獅子を配するものも存在する。大棟両端には鯢が乗り、降り棟に獅子頭等の意匠を施す。正面の屋根軒は身口縁に並行するもの以外に、唐破風屋根の曲線的な造形をとるものがある。

本論で考察の対象とする上焼を集成、身・蓋がセットで出土、あるいは博物館等に収蔵されているものを型式分類し、研究（1）で集成したものに、拙論刊行以降に報告書などで紹介された銘書資料を加え、各型式の年代比定を行う。これらは図示あるいは写真などが報告された事例に限る。ほかに墓の移転等に伴う民俗調査例も知られているが、型式学的検討を行うためには少なくとも実測図や写真図版などが必要で、筆者が管見におよんだ資料約130点（火葬用の素焼塗料彩色御殿形厨子4点含む）を対象に分析を行う。

### 3. 分析属性の抽出

資料の型式学的検討を行うのに際して、上焼の特徴を列記し各分析属性を抽出、分類、呼称統一を図る（図3）。

上焼は、身と蓋のセットで家形となる。蓋は屋根、身は身舎部分となる。蓋の屋根形式は寄棟、入母屋、重層、二層（唐破風）、変形唐破風の5種確認されている（⑧）。主体となるのは寄棟、重層、二層（唐破風）、変形唐破風がほとんどである。大棟中央には屋根飾りが付されるものがあり、付されるものでは宝珠、龍頭、獅子（シーサー）が乗る（⑤）。

蓋軒（垂木表現）は立体的な表現が多く、彩色を加えるものが認められる。屋根は希に無文のものもあるが、沈線によって屋根瓦表現される。変形唐破風の瓦表現は装飾過多となり屋根瓦の部分は狭小となる。

大棟の両端隅の装飾は鯢が棟をくわえ左右に配置される（⑨）。尾びれが天に伸びるのが一般的となる。希に鯢の無いものもある。研究（2）で1・2類としたものは基本的には無く、4類の大棟をくわえ大きく尾びれが反る大きな鯢が主となり、5類の鯢が簡略化し屋根中央飾りまで口が接した上で尾びれが反り返り左右尾びれがほぼ接するものを加えた。なお、屋根中央の龍頭とともにこれが尾びれと完全に接し一体化した装飾のものがありこれを6類とした。上焼の鯢は基本この4・5・6類の3類別されるが、バリエーションが認められその形態も漸次的である。なお、A形式の中には無装

飾のものもある。

降り棟は鯨の無いものにしばしば付されるものの、降り棟の装飾は屋根の造形の変化も相まってほとんど消失する。これに代わり隅棟が反り無装飾のものと獅子頭などを装飾するものがみられるようになる。隅頭は無装飾のものと獅子頭もしくはツノ、あるいはその両方が付される（⑩）。

身は、いずれも四脚で、正面から見て高さと同幅がおおよそ1：1となる方形・あるいはやや横長の長方形タイプから、脚幅に比して口縁部の幅がやや長くなる台形のものがある（②）。なお、厨子の大きさに関しては戦後にも聞き取りによれば、4～5種<sup>（註1）</sup>分け製作されていたようである（倉成2005：2-4）。

上焼の身正面の装飾は一般的に型を用いた貼付けによって施される。蓮華文が基本で、蓮華の形状、あるいは像の有無、大きさに大・小ある。加えて獅子、花文、円形浮文などが貼付けられる。身に付される像は基本的には左右対称で、赤焼でみられた六体配置はほとんどなく、蓮華に座するものや、蓮華隣に配するものとなる。多くは正面銘書面左右1点計2点貼付けられる。通常貼付文に釉薬が施される。貼付文の配置については、身正面のみあるいは、正面と側面に配するがほとんどである（③）。なお、研究（2）で脚や股形態について類型化を行ったが、本論では図示を省略しているがおおよそ赤焼・荒焼の分類で整理することができる。

釉による彩色は、黒、褐、緑、黄、青色（呉須、酸化コバルト釉）などがあり、古式は褐釉を素地に直接掛けるが、新段階は白化粧を施し透明釉を施釉し色彩も緑や青が多用されるなど、時代的な変遷も認められる。

身正面の屋門は寄棟、位牌、長方形、唐破風形、庇接続、アーチ形、唐破風、略唐破風などがあり、基本的には銘書面を有する（⑥）。

透かしは、方形に2ないしは3つ穿たれる、孔は円形のものが多い（④）。銘書面下端や胴部に円形孔が穿たれるものがあり、これは透かしとはまた異なる機能と考えられる。聞き取りによれば孔の中には指を入れて持ち上げる、あるいは斜め上に向かって突き刺し水分が入らないようにするなどの機能を持っていたとされる（倉成2005:2-3）。胴部穿孔例は新しい段階のものにみられる。

上焼の厨子の特徴の一つに、重ね焼きがある。三本の円筒形の俗にツノと呼ばれる露胎突起を有する（⑩）。これ以外にも、屋根、身内底などに目痕が認められるものがある。

最後に、底部には一般的に小孔が穿たれており、その数や配置については稿を改め検討を試みたい。

#### 4. 型式分類

分析対象とした上焼は主に屋根の形態から以下の2形式に分類する。

A形式（単層系）：寄棟・入母屋・一層（唐破風）

B形式（重層系）：重層、二層（唐破風）

型式分類は、研究（2）から分類を継続させ、身の形態および正面の屋門や文様、蓋（屋根）の形



態や鯨の意匠などの属性から細分した。Ⅰ・Ⅱ式は赤焼の型式であり、本論に関係しないものの、型式変化を理解するために、概略を紹介しておく。Ⅰ式は、身に屋門の無いもので、蓋屋根は瓦線彫りが無いものが多い。降り棟を持ち大棟中央に宝珠、小型の鯨を端部に付す。Ⅱ式は、屋門を有し、左右に型による像を貼付ける。Ⅰ・Ⅱ式はいずれも銘書面が無いのに対し、Ⅲ式以降は基本的に銘書面を持っている。

Ⅲ式：基本的に方形もしくは縦長の身に、正面屋門銘書枠は庇に接続させずに単独的に配置する。二層・重層屋根が主体となり、大きな鯨が乗る。屋根形式によってA形式単層（ほぼ入母屋）、B形式（重層・二層（唐破風））がみられるが後者が主体となる。施釉は褐釉、黒釉を掛け流すものを基本とし、鯨や蓮華文など部分的に緑釉などが施される。Ⅲ式の形態的な相違は、研究（2）でⅢbとⅢcに分類したが、本論でもこれを用いる。

Ⅲbは単層と重層があり、軒は口縁に並行する。銘書面左右に蓮華文、像が貼付けられる。正方形もしくは縦長の身で横長ものもある。中央に長方形、寄棟もしくは位牌形の銘書面を配置する。B形式の重層屋根は、屋根軒と蓋軒間の幅が狭く、装飾はほぼなく穿孔が施される。胴部に庇の無いⅢbは蓋、身の庇ともに口縁に並行となる。屋根形状から、Ⅲbは①単層（主として寄棟）、②重層、③単層に胴部庇を有するもの、④重層で胴部に庇の無いもののおおよそ4種に細分可能で、単層の資料は相対的に年代が古い方にまとまる。

Ⅲcは屋根の外観の軒が二層以上で最上部が唐破風屋根となる。B形式が主となる。管見の限り一層の唐破風屋根はみられない。Ⅲcは更に、庇が水平のものと、唐破風のものに細分可能で、後者は相対的に新しい方の年代にまとまる。なお、屋根軒と蓋軒の間は格子状の装飾をとるものが多いがこれは柱や窓など建築的な意匠をイメージしたものと思われる。

Ⅳ式：やや縦長の身に、口縁幅に対して底部幅がやや小さくなる台形の傾向が強くなる。身中央の銘書枠は胴部庇に接続し屋門の屋根部分となる。また、区画文を配し上下段で蓮華以外が貼付けられるものも出現する。屋根形態から唐破風形態のものと、これが変形した変形唐破風屋根に分けられるが、その形態的特徴は軒の表現と軒下の表現の装飾から明確に分けられるものとやや曖昧なものもあり漸次的である。なお、Ⅳ式の施釉は、素地に白土が多く用いられ、白化粧の後に透明釉を施釉する。貼付け、区画、格子文などには緑釉、呉須、褐釉、白釉などを施す。唐破風妻飾りなど表現から、B形式は2～3つに細分可能と思われるがこれについては課題とし、本論ではⅣaとⅣbに2大別する。

Ⅳaは、屋根軒と蓋軒の間に格子の装飾が施され屋根形態が保たれているものとする。本資料群の中にはいわゆる重ね焼きをするためのツノが付されたものが認められる。

Ⅳbは、唐破風が大きく逆U字形になり隅棟に接続する変形唐破風の屋根で、正面の屋根軒と蓋軒の間は建築物の格子や区画表現は薄れ、花、像、獅子などの貼付けが施され装飾性が高くなる。変形唐破風のタイプはほぼツノ付きとなっている。なお、身に庇が付され、庇に銘書面の接する庇接続の銘書枠となる。単層の資料が数例確認されているがいずれも入母屋屋根となる。

V式：変形唐破風屋根で身胴部に庇の無い一群である。銘書枠はほぼアーチ形で、希に唐破風がある。その左右に蓮華文もしくは蓮華文に像を貼り付ける。屋根軒下や銘書面上部には花文の貼付文が配置される。基本的にはツノ付きとなっている。施釉は白化粧後透明釉を施す。貼付文に緑釉、呉須、褐釉などを施釉する。本資料群にはコバルト釉を掛けるものが認められる。

VI式：変形唐破風屋根で鯨は中央の龍頭とほぼ接するほど大きく鰭が反り返る。円形浮文で身正面周縁を装飾する。銘書枠は略唐破風を付す。コバルト掛けを主とし褐釉など単色で釉薬を施す陶器質のものと、素焼きに青色塗料を施す資料に大別される。

## 5. 上焼御殿形厨子の型式変遷

①紀年銘資料 各型式の紀年銘資料の年代分布を図4に示す。年代分布はⅢbがおおよそ19世紀第1から第3四半期に、Ⅲcが19世紀第3四半期となる。これは赤焼のⅢb（19世紀前半）、Ⅲc（19世紀中頃）の年代観とほぼ調和的な年代観となっている。Ⅳ式が19世紀第4四半期を中心に分布、Ⅴ式が19世紀末から20世紀第前半、Ⅵ式が20世紀第2から第3四半期で、このうち素焼きの資料群は1969年が最古例であることから、戦後の資料と理解される。

以下、個別に見ていく。〔図5・1～5、以下枝番号のみ〕は、玉陵東室の王名等が銘書されている資料である。いずれも紀年銘は無いが、王代記、誌板などの記録から、死去年や改葬記録を参考に年代比定されている。

〔1〕第13代尚敬、〔2〕尚敬王妃仁室、〔3〕第14代尚穆、〔4〕第15代尚温、〔5〕尚典ほか各王族の遺骨が納められ、安置されている。

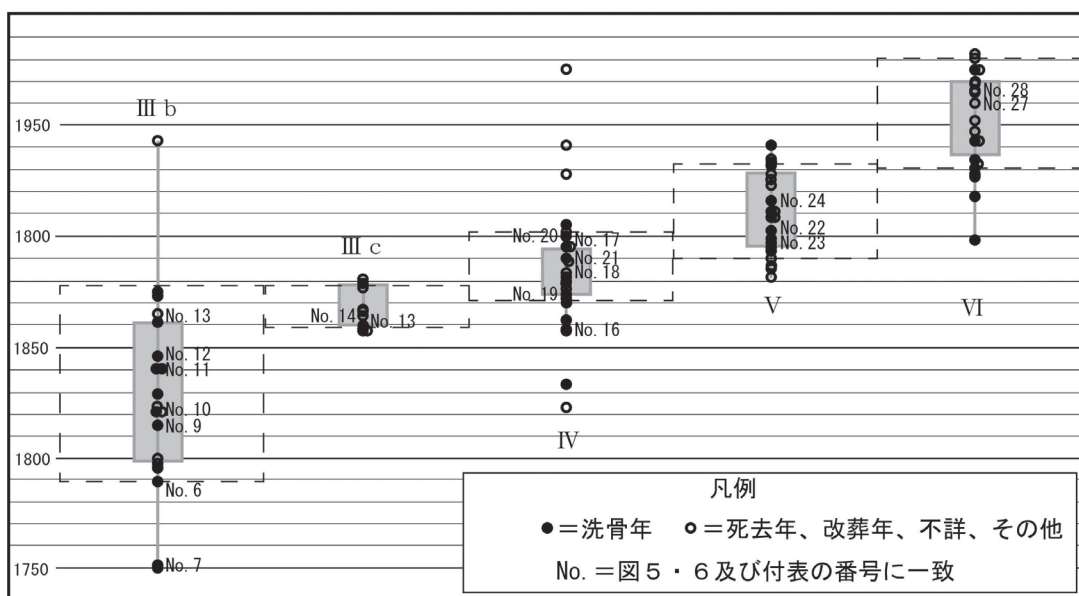


図4 上焼御殿形厨子の紀年銘散布図

玉陵東室に安置された御殿形厨子の資料群は、陶製御殿形厨子の上焼出現年代を考える上で最初に検討すべき資料群である。特に尚敬王厨子の位置づけについては、前項で紹介したように、倉成多郎により上江洲編年を引用し1759年の洗骨年時による調達ではないことが指摘され、1794年に早世した皇太子・尚哲の洗骨のタイミングで本厨子が新調された可能性を示している。具体的には〔3〕尚穆、〔4〕尚温、尚成が1834年に洗骨された厨子に納められたとした上で、この〔3・4〕尚穆・尚温と〔1〕尚敬王厨子の形態的相違を指摘し、そこから〔1〕尚敬王厨子の製作年代について、18世紀最末期から1834年の間と推測した上で、1794年の洗骨時に調達したと推察した（倉成2019:66）。

上記の年代を考察するため、記年銘資料の中から〔6〕八重山疏染と〔7〕壺屋焼物博物館が型式学的検討を行うにあたり参考になると考える。前者の形態は寄棟屋根で全体に飴釉を掛けており、蓮華文に彩色こそないものの、鯪の大きさや全体的なサイズは近似する。〔1〕尚敬王厨子が口径53.0×総高72cmに対し、〔6〕八重山疏染は口径52.5×総高67.2cmとほぼ同じ大きさとなっている。一方、〔7〕壺屋焼物博物館は入母屋造りで褐釉が全体に掛かる資料で、形態的には赤焼の型式ⅢaないしはⅡc段階に近い。〔7〕壺屋焼物博物館の記年銘は1751年となっている。最初期の上焼は、Ⅲa型式段階に褐釉を掛けた製品と考えられ、その年代は〔7〕の記年銘を参考にするとも1751年となるが、赤焼の同形態の資料との並行関係を考慮すると、18世紀中頃以降のどこかと幅をもって想定しておきたい。また、〔8〕名護博物館も赤焼Ⅱb型式に類似しており、赤焼のある段階で上焼技術が出現し御殿形厨子に施釉されたと考える。しかし〔1〕尚敬王厨子は更に蓮華文などの彩色も加わりその作りは明らかに丁寧である。Ⅲbで記年銘のある〔9・10〕は1810～1820年代の資料で、〔3〕尚穆、〔4〕尚温とほぼ同形となる。〔6〕八重山疏染に比していずれも鯪が大きくなり寄棟、起り屋根となる。ただ、玉陵東室の歴代国王の厨子はほぼこのⅢb型式となる。昭和9年（1934）洗骨の〔5〕尚典もⅢbの型式に分類されることから、王の厨子として特別に製作されたことがうかがわれる。

以上、単層屋根の資料群をまとめると、Ⅲb式前〔8・7〕において釉薬が掛けられる資料が登場し、入母屋で鯪が相対的に小さい〔1〕→寄棟で鯪が相対的に小さく、銘書枠が唐破風の〔2〕（1788）・寄棟で鯪が相対的に小さい〔6〕（1789）→〔9・10・3・4〕（1810～1834）の型式学的変遷が想定され、〔2〕・〔6〕を参考に1751年から1780年後半までが尚敬王厨子の製作年と考えたい。これは1794年を調達年と考える倉成の指摘よりやや古く見積もるものであるが、総じて幅をもって18世紀第4四半期にその出現年を想定しておく。今後倉成が指摘するように呉須の使用年代など周辺の焼物技術などを俯瞰し、本資料製作年代の確度を高めることが課題となる。

Ⅲbはこれまで紹介した単層のA形式以外に、外観二層以上のB形式が存在する。外観二層とする形状は重層屋根身胴部に庇が無い〔11〕、単層の屋根に庇が付される〔12〕、重層屋根に庇が付され外観三層となる〔13〕があり、いずれも軒は口縁と平行する。庇が付される資料群は年代的には新相であることが記年銘資料からうかがえ、1820年代の資料が数例みられるものの主体は1840～60年





図5 上焼御殿形厨子（1） 図：S=1/20，写真：任意

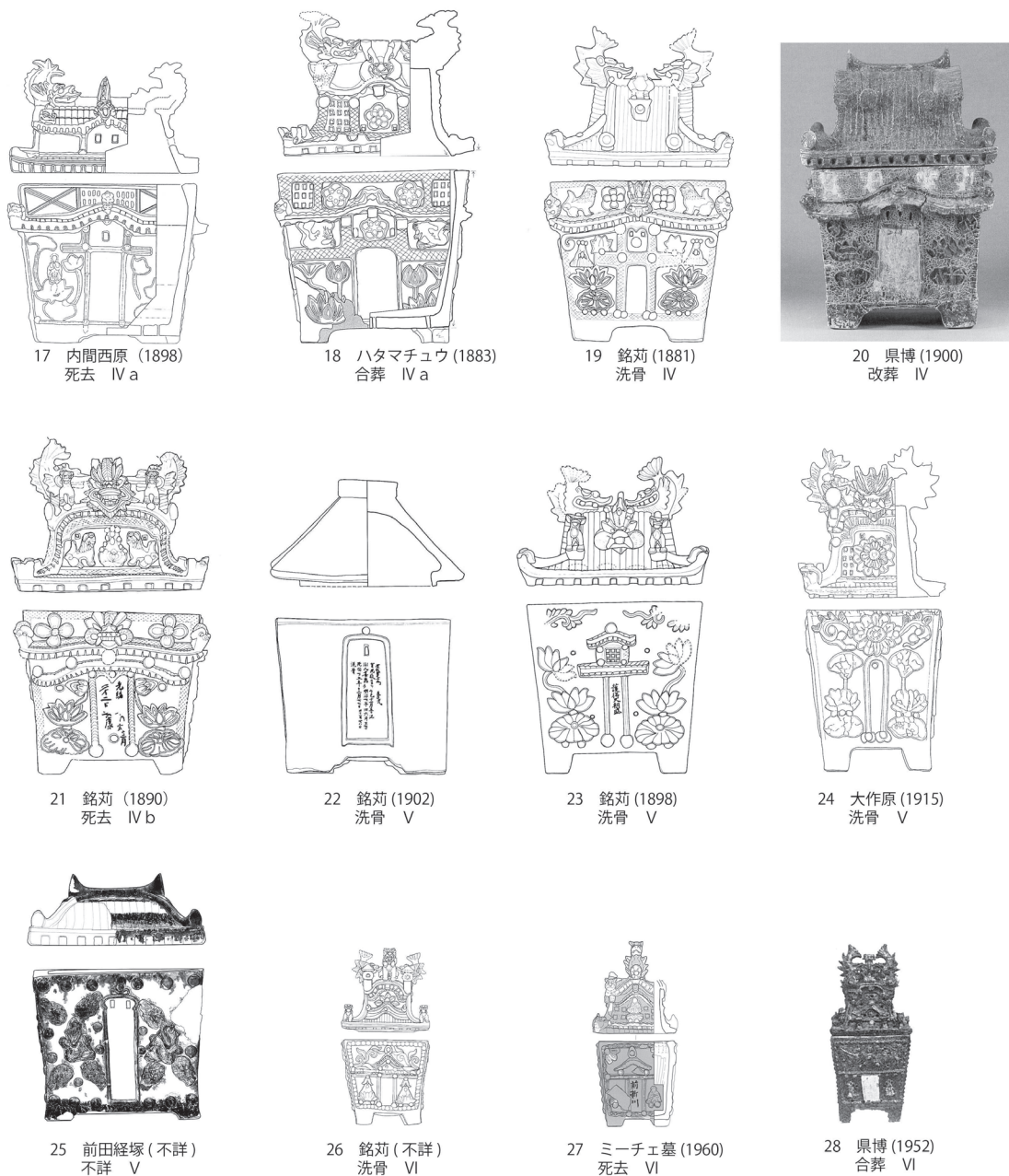


図6 上焼御殿形厨子(2) 図:S=1/20, 写真:任意

代となる。

〔14・15〕は唐破風の屋根、身胴部に庇が付される資料である。庇は水平となり、銘書枠屋根部分が庇と一体化せずに独立して配置されることからⅢ c に分類される。Ⅲ c の紀年銘資料は1858~1881年に分布することから、Ⅲ b に並行しつつも、おおよそ後続して登場するものと想定される。

〔16~21〕はⅣ式で、銘書枠が庇に接する資料群である。A形式〔19・20〕とB形式〔16~18、21〕があり、屋根でこれを細分しているため、A形式はⅣ式として類別する。B形式は屋根の形状から細分可能で、二層（唐破風）屋根と変形唐破風となる。二層の形態を保つ資料群は、おおよそ1860~1895年におさまる。また庇が唐破風となるものは、1880年以降となるため両者は併存しながらも、唐破風の庇が付されるⅣ b 〔21〕が新相になると目される。一方、A形式の資料は管見の資料がいずれも唐破風の庇であり、年代的にも1880年以降となっている。Ⅳ b の屋根は、唐破風が大きく逆U字形になり隅棟に接続する変形唐破風屋根〔21〕となる。後述するⅤ式以後この形態が変化しながら製作されたものと推測される。今回分析対象とした約130点の紀年銘資料中43点はⅣ式に該当し、上江洲が一般普及型と指摘しているが、これを傍証する（上江洲1980：367）。年代観は、Ⅳ a がほぼⅢ c に並行し1850年代後半~1898年に分布する。一方で、Ⅳ a の中でも庇が唐破風となる資料〔17・18・19・20〕は上限を1879年とし1895年を下限に分布している。変形唐破風屋根のⅣ b は1888年を上限とし1906年の間に主として分布している。庇が唐破風になる資料は、大方1879年沖縄県設置以後であることから近代に該当する資料となる。

〔22~25〕はⅤ式で、庇が付されない台形の身となる。屋根がA形式（単層）の寄棟〔22・25〕、入母屋〔23〕があり、B形式は変形唐破風屋根〔24〕となる。Ⅴ式の年代分布は一部外れ値の年代があるもののおおよそ1894~1929年に分布の中心がある。

〔26~28〕はⅥ式で、26・27は西洋コバルトを全面施釉する資料で、上江洲編年ではツノの付されない相対的に高価な資料として、ツノ付きのいわゆるソーバー厨子と分けて分類する。西洋コバルトの出現は上江洲によれば、一般に多いのは明治34、5年（1901、2）頃から戦後までとし、特に大正期に多いとする。全面施釉の一群以外にもⅣ b、Ⅴ式にも部分的に施釉するものがみられる。窯業技術者北村彌一郎によれば、明治18年（1885）頃より使用するものとして大阪から移入されたと報告している（北村1929:300）。酸化コバルト全面施釉は明治34、5年と指摘されているが、これ以前にもコバルト釉の使用が確認される。具体的には壺屋焼物博物館の門上コレクションの記年銘資料をピックアップするとNo149（Ⅳ式）が1889年、126（Ⅴ式）が1892年で淡い青色の発色で呉須による彩色と推測されるが、No.121（Ⅳ式）が1895年、150（Ⅴ式）が1910年でこの2点はいわゆる酸化コバルトの濃紺色となっており、おおよそ1890年代頃に呉須から酸化コバルトの転換が御殿形厨子の中でもあったと類推することができる。ただし、北村報告とは5年~10年ほど誤差があるため、該当の資料をより多く実見し酸化コバルト採用の推移を確認することが課題となる。

最後に〔28〕は素焼塗料彩色御殿形厨子で、屋門や大棟の鯢形態の簡略化が著しく屋根中央飾りと



一体となる。形態的にはコバルト全面施釉の特徴をそのまま引き継ぐが小型化する。年代的には上江洲編年では昭和30年代（1955）以降とされている。本資料は明らかに戦後に製作されたもので、市町村の発掘調査報告などの掲載例に乏しく4例から1969～1983年に分布する。

## ②近代の記録

近代の厨子を含む資料の型式学的検討を行うため、ここではいくつかの記録を示しておく。特に、古写真は参考になると考える。また、これ以外にも、戦前に収集された収集年のはっきりとした博物館収蔵資料がある<sup>(註2)</sup>。これらの資料については、本論の主題からは外れるものの、明治から昭和はじめの厨子について考える上で注目すべき資料と考えられる。

1901年「琉球横穴」のタイトルで、古墓を紹介した坪井正五郎は「(二)(ホ)は最も新しき者にて現に用いられ居候(二)は上等の方に有之磁製にて蓋には龍の形を現はし(坪井1901)」として陶製御殿形厨子について簡単な説明をしている(図7)。

他に、戦前撮影資料として作陶などが記録される図8、9などが知られ、前者は坂本万七による昭和15年(1940)撮影の厨子製作の風景で、昭和のはじめ頃に御殿形厨子として本論V式に該当する資料で、量産されている様子をうかがうことができる。後者は1930年頃(昭和5)の写真とされる。いずれもV式に該当するものと判断される。また図10も同形の厨子を運ぶ戦前の写真である。

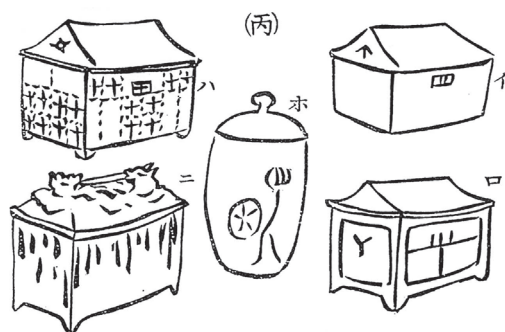


図7 琉球横穴墓掲載の図



図8 坂本万七撮影(日本民藝館提供)



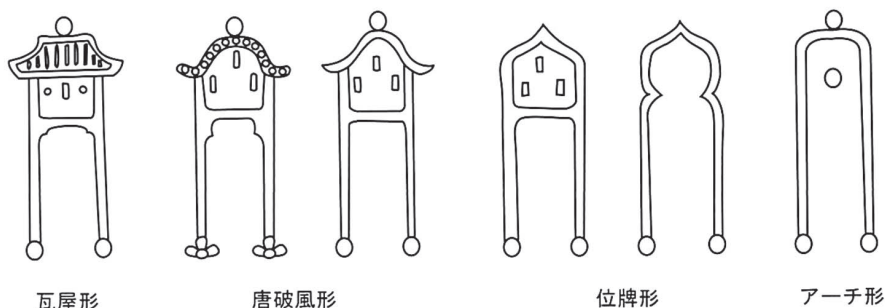
図9 陶芸工場風景(那覇市歴史博物館提供)



図10 厨子甕を頭上で運ぶ  
(那覇市歴史博物館提供)

年代	極年	屋門飾		蓮華文		横帯4		横帯3		屋門				
		柱	玉飾り	張	線形	突	沈	突	沈	瓦屋形A	唐破風形B	位牌形C	アーチ形D	線彫りE
1750														
1760	I期													
1770														
1780														
1790	II期													
1800														
1810														
1820	III期													
1830														
1840														
1850														
1860														
1870	IV期													
1880														
1890														
1900														
1910	V期													
1920														
1930			+		+								+	+
1940	VI期		+		+								+	+
1950			+		+								+	+

図11 厨子甕（身）の編年（安里ほか1997）



瓦屋形

唐破風形

位牌形

アーチ形

図12 屋門（ヤージョー）の分類（安里ほか1997）

### ③甕形厨子に見る類似属性

甕形厨子については安里進による細分編年案（安里ほか1997、以下安里編年）があり、これを参考にしていきたい。確認すべき資料は、マンガン掛け厨子で、本論で示した上焼御殿形の意匠に見る屋門（銘書面）や身正面、側面に施される蓮華文の貼付文が一致する。後者についてはおそらく同じ型を用いた可能性があることから、範傷などの研究が有効と考えられる。さて、安里編年では、マンガン掛甕形厨子82点を検討対象とし、紀年銘資料などから1790年代～1950年代に製作されたとし、6期に編年する（図11）。蓮華文の貼付けはⅡ・Ⅲ式に占有的だがⅤ・Ⅵ期は線彫りもしくは無文とする。庇付きはⅡ・Ⅲ式に25%ほど含まれるが、これ以降には希薄となる。屋門は瓦屋形、唐破風形、



























	D形式	A形式	B形式	C形式
一七世紀後半？ 一八世紀初頭	 赤 I a	 赤 I b		
一八世紀初頭？ 一八世紀中頃		 赤 II a	 赤 II a	
一八世紀中頃？ 一八世紀末	 赤 II b	 上 II b	 赤 II c	 赤 II b
一八世紀末？ 一九世紀中頃	 荒 III a	 上 III a	 荒 III b	 上 III b
一九世紀 第3四半期頃		 荒 III b	 上 III c	 荒 III c
一九世紀 第4四半期頃		 上 IV	 ツノ IV a	 ツノ IV b
一九世紀末？ 二〇世紀前半頃	 上 V	 上 V	 上 V	 ツノ V
二〇世紀第2？ 同第3四半期頃			 上 VI	 コバ VI

図 13 陶製御殿形厨子編年表 (図：S=1/40, 写真：任意)

位牌形、アーチ形に分類する（図12）。A瓦屋形は安里編年Ⅱ期に占有的な属性でⅢ期段階にも散見される。紀年銘をみると1761～1851年に資料は分布する。上焼御殿形厨子でも屋門が付されるのは本論Ⅲb、Ⅲc式で年代的にも19世紀前半にほぼ限定され整合的である。唐破風形は安里編年Ⅱ・Ⅲ期にみられる属性で、紀年銘は1814～1885年となる。本論Ⅲcでは単独的にこの唐破風形と類する形態がみられるものの、底接続の屋根部分が唐破風となるものが類似する形態と考えられ、本論ⅢcとⅣ式がおおよそ並行関係にあると考えられる。他方安里編年の位牌形に相当するものは本論Ⅲ・Ⅳ式に散見され整合的ではない。また、Dアーチ形は安里編年Ⅴ式に占有的で、Ⅳ式にもこれを有する資料がある。紀年銘は1821・1853などやや古い年代のものもあるが、1900年代にまとまりがある。本論Ⅴ類にほぼ占有的に認められるアーチ型は19世紀末～20世紀初頭と想定しており、これと整合的である。

以上、甕形の属性の中でも屋門の形態を中心に見てきた。本論では貼付文などの文様については十分に検討を加えることができなかった。今後より詳細な検討を行うことで、甕形と御殿形の両形式を合わせた厨子文化の総合的な編年を進めることを課題として指摘しておきたい。

## 6. おわりに

研究（2）の赤焼御殿形厨子の編年（宮城2020）に続き、本論では上焼御殿形厨子の型式学的検討や年代観について示した（図13）。執筆にあたり、上焼御殿形厨子の編年は、こと琉球窯業史にも十分に目配りし検討されるべき課題が多いことを実感した。特に古我知焼操業年の課題、西洋コバルトの普及などを考える上で大きなヒントを与える資料群であることを改めて認識することができた。なお、本論では陶製御殿形厨子の編年観を示すことができたが、石厨子の編年は未着手である。次回以降これに取り組みたい。

本論を執筆にあたり次の方々からご教示頂きまとめることができました。記して感謝申し上げます。Alexandra Garrigue、安和吉則、伊集守道、上原静、江上輝、大城 直也、倉成多郎、鈴木悠、篠原あかね、高嶺よし乃、月森俊文、比嘉立広、前田一舟、又吉幸嗣、吉田健太（五十音順敬称略）

付記：本稿は「墓葬制からみた琉球史に関する基礎的研究」（基盤研究C、課題番号18K00981、研究代表：宮城弘樹）の成果の一部である。

### 《註》

註1. 新垣用栄氏聞き取り①大人2人、②大人1人、③青年用、④子ども用、⑤④より一回り小さいものの5種。小橋川清正氏聞き取り①タイリー（成人骨二柱）、②チュイリー（成人骨一柱）、③ジュウロクグラー（②より一回り小さい）、④タマシイイレ（用事また、遺体が見つからない場合枝珊瑚や小石を骨の代わりとして納めるもの）の4種。（倉成2005：2-5）

註2. 戦前の収集資料として、東京国立博物館、日本民藝館、海外ではイギリスのピットリバース博物館などが挙げられる。

註3. 研究（1）（宮城2019）【付表の上焼部分の正誤一覧】No.186(誤) 咸豊5年、洗骨、1855→(正)不鮮明のため年代削除。

## 《参考文献》

安里進・ほか1997『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者一近世墓の考古学的調査による家族復元－』浦添市教育委員会

上江洲均1980「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』新日本教育図書pp.341-374

上江洲均1981「沖縄の厨子甕」『日本常民文化研究所調査報告』第8集 日本常民文化研究所pp.109-148

北村彌一郎1929「沖縄縄文」『工学博士北村彌一郎窯業全集 第3巻』大日本窯業協会pp.288-300

倉成多郎2005「厨子甕の製作について」『壺屋焼物博物館紀要』第6号 壺屋焼物博物館pp.1・8

倉成多郎2019「尚敬王 陶製御殿型厨子」『國華』1486号 朝日新聞社pp.65-68

照屋善義2000『沖縄の陶器 技術と科学』照屋善義

那覇市立壺屋焼物博物館2014『沖縄縄文・陶器の精華 厨子 門上秀叡・千恵子コレクション収蔵記念報告書』

文化財建造物保存技術協会1977『重要文化財 玉陵復原修理工事報告書』玉陵復原修理委員会

宮城弘樹2019「御殿形厨子の研究（１）－紀年銘資料の集成を中心として－」『南島考古』No.38 沖縄考古学会 pp.1-20

宮城弘樹2020「御殿形厨子の研究（２）－赤焼・荒焼御殿形厨子の編年－」『南島考古』No.39 沖縄考古学会 pp.115-126

付表 掲載御殿形厨子一覧

No	種別	形式	型式	遺跡名等	墓名等	登録/ 図No	基準紀年銘 (参考記載)	洗骨 死去	西暦	備考	文献	(1) No
1	上	A	Ⅲ b	玉陵	東室	㉑	(尚敬御安骨並御遺骨日記)		1759	第13代尚敬(1700-1751)	文建協1977	未掲
2	上	A	Ⅲ b	玉陵	東室	㉒	(木製誌板か)		1788	尚敬王紀仁室(1705-1779)	文建協1977	未掲
3	上	A	Ⅲ b	玉陵	東室	㉓	(陶札)道光14洗骨		1834	第14代尚穆(1739-1794)	文建協1977	未掲
4	上	A	Ⅲ b	玉陵	東室	㉔	(陶札)道光14洗骨		1834	第15代尚温(1784-1802)	文建協1977	未掲
5	上	A	Ⅲ b	玉陵	東室	㉕	(昭和9年御安骨)		1934	尚典(1864-1920)	文建協1977	未掲
6	上	A	Ⅲ b	八重山琉染工芸館蔵		p140	乾隆	54 洗骨	1789		佐賀九陶1998	173
7	上	A	Ⅲ a	那覇市壺屋焼物博物館収蔵資料		No. 70	乾隆	16 洗骨	1751	判読不明の年号複数あり	壺屋焼博2014	172
8	上	A	Ⅱ b	名護博物館収蔵資料		台帳5904	無し				名護博1996	未掲
9	上	A	Ⅲ b	那覇市壺屋焼物博物館収蔵資料		No. 131	嘉慶	20 洗骨	1815		壺屋焼博2014	175
10	上	A	Ⅲ b	前田経塚近世墓群	7号	22-109・110	道光	2 不詳	1822	※要確認	浦添市2017c	178
11	上	B	Ⅲ b	那覇市壺屋焼物博物館収蔵資料		No. 166	道光	20 洗骨	1840		壺屋焼博2014	184
12	上	B	Ⅲ b	那覇市壺屋焼物博物館収蔵資料		No. 139	道光	25 洗骨	1845		壺屋焼博2014	185
13	上	B	Ⅲ b	那覇市壺屋焼物博物館収蔵資料		No. 128	咸豊	11 洗骨	1861		壺屋焼博2014	192
14	上	B	Ⅲ c	那覇市壺屋焼物博物館収蔵資料		No. 114	同治	3 不詳	1864		壺屋焼博2014	未掲
15	上	B	Ⅳ a	前田経塚近世墓群	7号	22-111・112	無し				浦添市2017c	未掲
16	上	B	Ⅳ a	安謝西原古墓群	43号	29-1・2	咸豊	12 洗骨	1858	光緒2, 咸豊6, 10合葬	那覇市2001b	191
17	上	B	Ⅳ a	内間西原古墓群	27号	49-27-16	光緒	20 死去	1898		浦添市2004	215
18	上	B	Ⅳ a	ハタマチュウ古墓群	2号	25-1・2	光緒	9 合葬	1883		那覇市2011	236
19	上	B	Ⅳ	銘苅古墓群	C-11	62-4・5	光緒	7 洗骨	1881		那覇市1999	208
20	上	A	Ⅳ	県博収蔵資料		31	明治	33 改葬	1900		上江洲1981	217
21	上	B	Ⅳ b	銘苅古墓群	B-10号	70-2	光緒	16 死去	1890		那覇市1998	244
22	上	A	Ⅴ	銘苅古墓群	12-13号覆土	71-1・2	明治	35 洗骨	1902	明治死、咸豊7洗、明治3死葬	那覇市1998	未掲
23	上	A	Ⅴ	銘苅古墓群	A-19	50-1・2	明治	31 洗骨	1898	光緒24(1898)	那覇市1999	213
24	上	B	Ⅴ	大作原古墓群	1号	24-2	大正	3 洗骨	1915		北谷町2003	263
25	上	A	Ⅴ	前田経塚近世墓群	51号墓	28-1・2					浦添市2017b	未掲
26	上	B	Ⅵ	銘苅古墓群	F-1	51-1・2				不鮮明	那覇市1999	186
27	上	B	Ⅵ	ミーチェ墓	15号	4-22-037	(西暦)	1960 死去	1960		金武町2019	未掲
28	火	B	Ⅵ	県博収蔵資料		54	(西暦)	1952 死去	1952	昭和14年(1939)死去	上江洲1981	289

※未掲載の引用文献は、本論参考文献に掲載。それ以外は拙稿（宮城2019、2020）に掲載

**A study on the urns of palace style (3)**  
**Chronology of “*Jōyachi*” pottery baked at high temperature with glaze**

Hiroki MIYAGI

**Abstract**

This paper is part of a series dealing with “urns of palace style”. In the Ryūkyūs, funerary urns are called “*zushis*” (厨子). The first article of the series (1) presented a collection of chronological data (funerary inscriptions), while the second one (2) proposed a chronological typology of unglazed soft paste stoneware and hard paste stoneware urns of palace style.

This paper, in the continuation of the second article (2), will propose a chronological typology for the *jōyachi* urns of palace style. *Jōyachi* are stoneware pieces that are glazed before firing.

The sorting method was based on the consideration of typological elements crossed with the collected chronological data (funerary inscriptions).

The sorting resulted in the determination of four different types and the proposition of a chronological typology for the glazed stoneware urns of palace style, from the latter half of the 17th century to the 20th century.